

横浜市立永谷小学校 平成28年度 学力向上アクションプラン

1 学校の状況と地域の実態

- (1) 市内小学校全体で若年層教員の多い中、本校の職員構成は若年層・中堅・ベテランとバランスよく、指導技術も総じて高いと考えられる。
- (2) 平成26年度・27年度の理科を通じた研究を通して、理科へ児童の関心・意欲が高まるとともに、教員の研究・研修は定着し、成果をあげている。今年度も引き続き理科の研究を進め、学校教育目標との関連、テーマに即した研究活動など、研究の目的をより明確にしたものにしていく必要がある。
- (3) 地域の方々の学校に対する協力の姿勢は年々高まっている。地域ボランティアを活用した学習を積極的に取り入れる努力をしているが、学校・家庭・地域との連携をより活性化していく必要がある。
- (4) 特別な教育的支援が必要な子が多く、対応の体制をきめ細やかにしていく方策は課題と考える。
- (5) 校内組織について、毎年反省を踏まえ、組織の統廃合・放課後時間の効果的な運用を試み、研究・研修時間確保などの一定の成果を得ている。

(6) 学力・児童の生活習慣の傾向

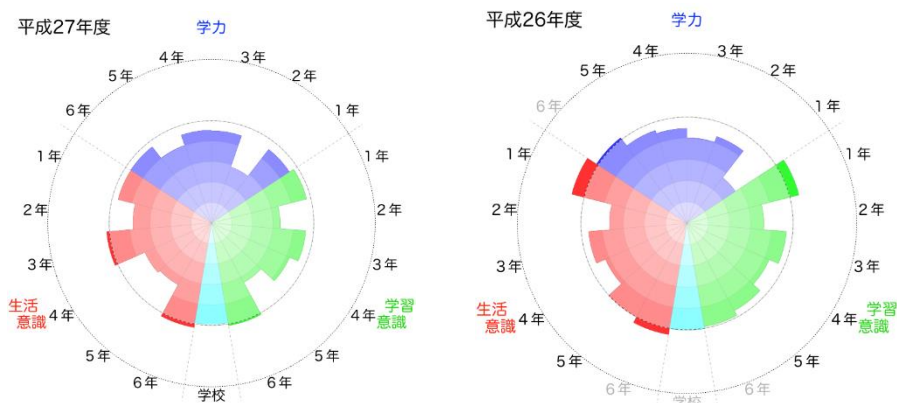
過去3か年にわたって家庭での学習・読書を定着させる取り組みを進めた結果、市の平均程度の学習時間を確保できている児童・家庭が増えた。しかし、従来から課題である学力や学習意欲の個人差について今後も対応していく必要がある。(90分以上学習している児童→市15%本校12% 10分ぐらい以下→市21%本校19%) (読書1時間ぐらい以上→市19%本校15%)

2 今後3年間の方向【平成28年度～平成30年度 中期学校経営方針(1年目)】

(1) 学力向上に関する指導の目標・方針(平成27年度末の姿)

- 家庭との連携を密にし、計画的に家庭学習ができるよう情報の提供・課題の提示を行っている。
- 児童の学ぶ意欲を高めることを意図した学習を展開し、自分の考えを適切に表現できるようにする学習にしていくことを通して、思考力・判断力・表現力のバランスのよい育成が図られている。
- 家庭学習の成果と、それらで培われた能力を高める授業を展開し、市学力状況調査の標準化得点が2ポイント向上している。
- 特別な教育的支援が必要な子どもの在籍する学級において、安定した授業ができる指導技術を一人ひとりの教師が身につけている。
- 学校運営のより一層の工夫を図り、放課後における研修・研究時間を週1回以上確保し、実践的・協働的な研修・研究を行っている。

3 横浜市学力状況調査等からの平成27年度(昨年度)の実態把握



1) 学力の概要の分析

<本校教育の成果>

全体としては、横浜市の平均的な学力よりやや低い傾向にある。継続してこれまで取り組んできた理科に関しては、昨年度よりも上昇傾向が見られるが、国語に関しては、高学年の「読む」「書く」の個人差が大きく、学習意識の結果も他教科と比べ低めである。

グラフから学習意識全体をとらえると、昨年度より若干の低下が伺える。しかし、項目別に見てみると、昨年度は、4年から6年を中心に向上していた学習意識が、今年度は1年から3年も各教科の学習が「好き」と回答している子が増えている。これまで積み重ねてきた「楽しく学ぶ学習」をテーマとして取り組んできた社会科・算数科・理科の授業改善や主体的な学びを目指す単元づくりの成果が現れたと考える。

2) 学力の概要の分析をもとにした今後の本校教育の課題と今後の方向性

社会や理科の学力が高いのは、問題解決型の学習が定着しつつある表れである。反対に低い傾向にある国語と算数に関しても、問題解決型を意識した授業や子どもたちが取り組みやすいスキル学習などの工夫が必要である。また、国語の「読み」「書く」の弱さは、他教科への影響が大きいと考えられる。

今後の授業改善については、理科教育・重点研究を中心とした、主体的に学び、自信をもって表現する子の育成を目指した授業改善により、学習をさらに充実させたい。本校児童の学力を向上させるための方策としては、これまでの家庭学習の充実に加え、個々を見とってしっかりとした指導が必要である。この方向性を軸として、本校児童の学力向上の具体を考えていくこととしたい。

4 平成28年度 目標と具体的方策

～平成28年度 目標の方向性～

主体的に学び、自信をもって表現する子どもの育成

「子どもの考えを生かす」指導法の追究

(1) 学校組織としての共通の取組

○家庭学習の充実

家庭での学習活動に計画的に取り組めるようにし、課題解決力や課題発見・追究の力の素地を養う。

○言語活動の充実

- ・「書く」ことを中心に、自分の考えを表現する機会を学校生活に位置づけ、また、授業でも書いた考えを活用する学習を意図して行う。
- ・「読書タイム」「ほのぼのタイム」など、本・文章に触れる機会を学校生活に位置づけ、読むことを中心とした言語活動に興味をもち、楽しく取り組めるようにする。

○特別支援教育の充実

発達障害等にかかわる研修会を定期的実施し、指導技術を習得する。

○研修・研究会の時間の確保と内容の充実

さらに会議の統合、時間運用の工夫等により研究・研修の時間を増やしていく。

(2) 学年・教科等としての取組

※個別支援 1・2年(低) 3・4年(中) 5・6(高)のブロックごとに取組の方向を考えていく

個別支援級

○個別の教育支援計画に「話し言葉」「表情・仕草」「書き言葉」等。発達段階に応じた適切なコミュニケーションについて位置づけ、適切に評価していく。また、子どもの発達段階に応じて各学年の取組を参考にし、必要な取組を工夫して行い、個に応じたわかりやすい情報発信をするなど、言語環境の整備を行う。

低学年

○発達段階に応じた反復練習的な課題に取り組めるよう意図し家庭学習の素地をつくる。
○各教科で書く楽しさを味わえる活動を積極的に取り入れ、表現活動を大切にしていって取組を具体化していく。

中学年

○発達段階に応じた基礎的な課題に取り組めるよう工夫し家庭学習の定着充実を図る。
○各教科で説明する文章、記録する文章を書くなど、表現活動を大切にしていって取組を具体化していく。

高学年

○発達段階に応じた基礎的な課題だけでなく、自ら課題を設定・解決できる活動を工夫し家庭学習の充実を図る。
○各教科で文章・記録する文章などを、豊かに表現する工夫できる取組を具体化していく。